

# KSK湘南ふくしネットワーク オンブズマン



編集責任者：NPO 法人湘南ふくしネットワークオンブズマン 高山直樹  
事務局 〒251-0871 神奈川県藤沢市善行 4-3742-4 電話・FAX 0466-81-9218  
直通電話 090 4937 4904 定価 100 円  
ホームページ <http://www.npo-snet.com> eメール [info@npo-snet.com](mailto:info@npo-snet.com)

## 第3回権利擁護についての市民セミナー 生活を取り戻す地域ケア

湘南ふくしネットワークでは、来る2月15日(日)に、第3回権利擁護についての市民セミナーを開催します。今回は、講師に宮島渡さんをお招きし、長野で実践されている特養「アザレアンさなた」の地域ケアから、新しい取り組みを紹介していただきます。ふるってご参加ください。

### 基調講演 「長野だからできるのか？ 特養の出前方式」 ～厚生労働省の新しいモデル～

講師：宮島 渡 氏 (社会福祉法人恵仁福祉協会 アザレアンさなた 施設長)

「逆デイサービス」「施設機能の地域分散ケア」「小規模多機能サービス」などをキーワードに、長野県の先駆的実践について伺います。

### 鼎談 「湘南でやりたい！ “地域ケア”」

高橋 健一 氏 (社会福祉法人翔の会 高齢者支援部長)

小川 泰子 氏 (社会福祉法人いきいき福祉会ラポール藤沢施設長)

他

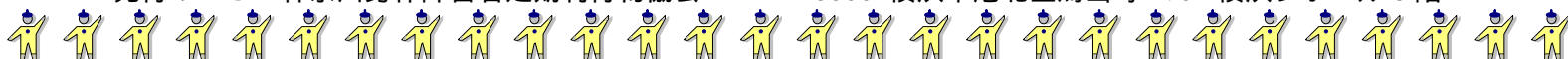
湘南でも、ユニットケア、宅老所など新しい取り組みが始まっています。それぞれの持ち場での取り組みと、神奈川での「地域ケア」の展開の可能性について語り合います。

日時：2004年2月15日(日曜日) 午後1時30分～4時30分

会場：茅ヶ崎市農協会館

参加費(資料代)：1000円(当日受付にて)

お問合せ：事務局 ,Fax 0466-81-9218



地域生活支援研修講座要約

\*\*\*TOPICS\*\*\*



## 誰が老人を救うのか～高齢者施設内虐待の現実～

講師 川越智子氏

去る11月24日、茅ヶ崎市役所分庁舎において、高齢者施設内虐待の現実と、今後の可能性について、フリーライターで、また湘南ふくしネットワークオンブズマン、NPO法人市民によるオ

ムツ減らし研究学会員でもある川越智子さんによる、講演が行われました。日本の高齢者施設における虐待の驚くような事例の紹介などもありました。その内容の一部をご紹介します。

### 高齢者虐待の定義

高齢者虐待の定義は、各研究団体などによって定義されています。その5つの定義とは

- ・ 身体的虐待
- ・ 心理的虐待
- ・ 経済的虐待
- ・ 性的虐待
- ・ ネグレクト

となっており、それにセルフ・ネグレクトなども合わせて考えられています。殴る・蹴るといった虐待は施設では起こらないと考えられていることが多いのですが、必ずしもそうではなく、またカーテンを使用しないオムツ交換なども本人にとっては性的な虐待であるといえます。

### 介護事故

2001年度、神奈川県を集計によれば、1年間の介護事故件数は1376件でした。そのうち死亡が46人、骨折など重大な怪我が582件となっています。介護事故というのは、転落、転倒などによる怪我の他、介助中の事故による、あざ、出血、やけど、誤嚥、異食、薬の誤配なども含まれ、

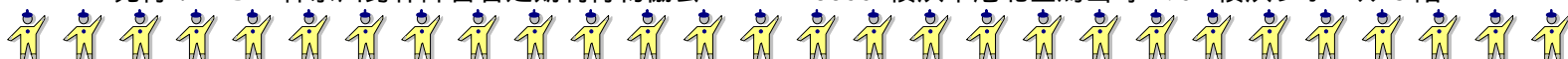
そうした事故による損害の賠償、医療費の請求などは、施設に対し行うことができます。介護事故による各地での裁判なども行われており、泣き寝入りせず原因を追求し、改善を求めていく姿勢が必要です。また、介護事故の中には虐待によって生じた怪我が疑われる場合もあります。

#### 事故に遭ったときの対応

1. 事故後すぐに施設の説明を受ける。正確を期すため、録音テープやメモで記録
2. 「入院費を払ってもらえるか」など、どのくらい補償する意向があるのかを施設に確かめる
3. 示された補償内容に不満なら、疑問を伝えて話し合いを続ける
4. 話し合いに応じてくれないなら、簡易裁判所での調停や一部の弁護士会にある仲裁センターなどの紛争解決機関を利用。自治体の苦情対応窓口にも相談
5. それでも納得できないなら、損害賠償請求訴訟などを起こすことになる

高齢者福祉施設では、その集団生活の構造、人員配置基準などがすでに、構造的に虐待であるといえます。その人個人の尊厳を守ることの

できる、私物の持ちこみや、個人の意志を尊重したライフスタイルが送れる高齢者の社会を一刻も早く築く必要があるのです。



オンブズマンに届いた切実な声

# ともだちになってください

障がいのある方たちにとって、まだまだ一般の方の認識は低く、その差別意識は根深いものがあります。これは、私たちが触れた障がい

をもつ方からの生の声です。これを読んで皆さんは、どう思われますでしょうか？どこから変えていかなければならないでしょうか？

通称 しげちゃんと言いで下さい  
ちゃんづけをしてください  
ちゃんをつけてください  
友達になって下さい  
仲良くして下さい  
お話をして下さい  
ゆびきりをして下さい  
きずいて下さい

ふりむいて下さい  
笑って下さい  
にぎやかにして下さい  
(原文のまま)  
(工房絵 Nさん名刺より)

近所の小学生や、その親や、それから大人が障がい者だって指をさしたり障がい者としゃべっちゃだめだという。障がい者がいるから帰ってきなさいという。外に出るといじめられる。石を投げられたり、けられたり障がい者だから帰れとうちの子に近寄らないでという。ぼくがいくとサーッと逃げちゃう。

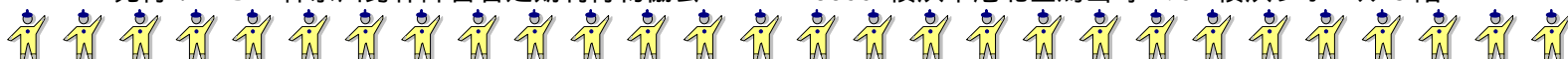
買い物に行ったときも、じろっと見られてしまう。店員さんにもじろっと見られる。きれいに商品を見ているのにきつく注意される。それが一番怖い。外に出るのが怖くなってきた。ずっとそうだから耐えられない。

ぼくはなりたくて障がい者になったんじゃない。なんでみんなぼくのことわかってくれないんだろう。お父さんもお母さんも気にするなって言ってくれるけど、気になる。

もっと声をかけてほしい。あいさつをしてほしい。お店でじろじろ見ないでほしい。いっしょに遊んでほしい。みんなにわかってほしい。それがぼくの願いです。

(知的障害者通所施設にて Yさんからの相談より)

(ご本人の希望から、この願いを多くの人に届ける約束をしました。皆さまも回りの人にこの言葉をどうか伝えていってください。)



# 成年後見制度を考える Vol.2 Vol.3

S ネットオンブズマン 大石 剛一郎 (弁護士)

成年後見制度が、「私のことは私が決める」という大原則を大きく修正するものだとすると、「成年後見人」にはやはり、私のことを一番よく知っている身近な人になってほしい、と思うのは当然ではないでしょうか。確かに「一番よく知っている」「身近にいる」がゆえの問題、つまり、「その人が私のことを考えれば考えるほど、その人は過重労働を強いられることになる」とか、「私の財産とその人(成年後見人)の財産

の区別が曖昧になってしまう」、といった問題・危険はありますが、それは、たとえば「成年後見監督人」などのチェック・システムを用意し充実化する必要がある、という問題でしょう。それはまた、別のレベルの問題なのではないでしょうか。やはり、何よりも大事なのは、私に必要なことを判断して選択してもらい、というそのこと自体なのであって、そこに内在する問題性や危険性の方が主役のように扱われるのは、やはり「本末転倒」のような気がします。

成年後見人には、できれば、自分のことを一番よく知っていて、自分のことをよく考えてくれる、身近な人になってほしい、と思います。しかし、そのような身近な人がいない場合もあります。居たけれど居なくなってしまう場合もあります。居るけれど、信用できない、という場合もあります。また、利用可能な福祉サービスや必要な法的対応に関する判断についてほとんど期待できない、という場合もあります。もしかすると、これらのいずれかにあてはまる(可能性のある)ケースは、かなり多いのかもしれませんが。成年後見人について必要なポイントをまとめると、自分のことをよく知っている、継続性が

ある、信用できる、利用可能な福祉サービスや必要な法的対応についての判断に判断することができる、ということですが、これらを全部兼ね備える人などいるのでしょうか。可能性があるとしたら、本人のことをまめに見守れる人(これが一番大事)や利用可能な福祉サービスについて豊富な情報・知識・ノウハウを持っている人や必要な法的対応について知識・技術を持っている人をスタッフとして豊富に抱えている、「本人が本人らしく主体的に生きることを支援する」という明確な理念を持った組織(NPO法人)だと思います。

## 湘南ふくしネットワークオンブズマン

### 新人紹介

岡崎清子 (おかざき きよこ)

オンブズマンの養成講座では、いろいろと得るものがありました。以前から漠然と考えていたことが「支援の網の目」という言葉になって示された時、その概念を軸に皆で参集し、また、個々の行動も起こしてゆけるような気がしました。

さて、オンブズマンという仕事を始め、現場に出ればばらばらすると、少しずつ問題も見えてきました。先方にとっても期待や不満や疑いが生じ、相手の心や、人間関係の妙、物事のあり方などを

ないかと、思えるようになってきました。そんなある時、ある男性ばかりの通所施設の、そのやや雑然とした、しかしなぜか余裕があって暖かいその様子が「男の合宿所」のように見えました。これまで、母親やお世話する人の庇護のもとあった「男たち」の自立した自由空間。それを可能にしていたのは、どこまでも心暖かく真面目な男性職員らであることを確信し、やはり人を支えるのは人的支援だと、私の心まで暖かくなったのでした。

### 編集後記

時間のなかで作成した今回の会報でしたが、生の声な

どもお届けでき、充実したと思います。(川越)

